

空手道詳説（6）

第2章 沖縄史の概要

4 沖縄史の時代区分

(1) 先史時代

那覇市で出土して「山下洞人」と名付けられた化石人骨は、今から約3万2000年前のもの。具志頭村（ぐしかみそん）の港川（みなとがわ）の海岸に近い石切場で1967年に発見された化石人骨「港川人」は、約1万7000年前のものとはほぼ確定されている。

これらの化石は「旧石器時代人」で、約7万年前に始まり約1万年前に終了し、地質学的、地理学的、気候学的に最も詳しく研究されている最後の氷河期であるヴェルム氷期とかウィスコンシン氷期と呼ばれる時期に、中国大陸方面から陸橋を渡って琉球列島にやってきて、やがて日本列島を北上したのでないかと推定されている。なお、沖縄が大陸から離れ、島化したのは約2万年前である。

右の写真は、国立科学博物館に展示されている港川人化石のレプリカで、全体的に小柄で胴長なのに、腕は細めで手は大きく、下半身がしっかりしていた体形である。発掘された化石の身長は男性約153～155cm、女性は144cmであった。

かつて、港川人は縄文人の祖先ではないかと考えられた時期があった。しかし、最新の研究によれば縄文人とは遺伝子構造に隔たりがあって、現代人ならオーストラリア先住民（アボリジニ）やトレス海峡島民、パプアニューギニア人のグループ近く、時代区分なら「後期旧石器時代」と位置付けられ、洞窟で暮らし石器を主な道具として魚介類採集の生活と思わ



れるが、石器類の発見がなく詳しい生活様は分かっていない。

オーストラリア先住民に近いという推定なら、この化石人は南インドに端を発した可能性が浮かび上がる。

沖縄において、港川人から約1万年の長い空白期間をへて登場するのが、約7000年前にはじまる「新石器時代人」で、日本の縄文文化が移入されている。

その人たちの痕跡は、沖縄本島北部を起点とし、しだいに全域に広がる貝塚の発見により調査研究が進み、貝塚時代ともいわれている。この時期は長く、日本なら平安時代の11世紀頃まで続いた。

貝塚時代は、住居跡遺跡の発掘調査によって、九州地方から原始的な農耕文化とともに移動してきた人たちと推定されている。

更に研究が進み、貝塚時代における早期、前期は九州との交流が深かった時代。中期は奄美島や沖縄諸島独自の文化が発生した時期とされる。後期は再び九州との交流が盛んになり、中国大陸の影響も随所に見られる。晩期には「根切」といわれる集落が形成されていく。

弥生時代に相当する遺跡は海岸砂丘地に多く、出土品から九州や中国と交易が行われていた形跡は濃厚ながら、現時点においては水田農耕の跡が発見されていない。その意味するところは、日本でいう古墳時代から平安時代にかけての奄美を含む沖縄古代社会では、未だ狩猟採集段階の生活が続いていたと考えられている。

一方、先島（さきしま）と称される宮古・石垣・八重山諸島の先史時代は、奄美・沖縄諸島とは異なる文化圏が形成されていた。縄文文化や弥生文化の影響をほとんど受けることなく、むしろ南方方面の地域との交流を示す遺跡が多く見られる。

以上を概観すれば、当時の沖縄と日本との関わりは、少なからず影響を受けた時代と、行き来が少なくなる時期の繰り返しがあったと分かる。

(2) 部落時代

農耕民が定住したのは、祖先神が天下り鎮座したと信じられる小高い丘と柱で、周辺にほどよい耕地が広がり、毒蛇のハブやマラリヤを恐れて湿地が少なく風通しが良い場所が選ばれたようである。

その人たちの集団は血縁関係によって構成され、時には他の血縁集団との合体も繰り返され、次第に固定化し共同社会化が進むと、草分けの家の戸主が支配権を握り「根人」となって統制権を持つようになる。それを「エケリ」と呼んだ。

根人の部落支配は財力や武力で行われたが、もう一つ宗教力が強く作用したと考えられている。その宗教力は根人（エケリ）ではなく根人の姉妹にあった。この姉妹は「オナリ」といって、何処にあっても兄弟を保護する神で「オナリ神」と呼ばれ、「オナリ神」の持つ霊力が部落を守ると考えられていた。「オナリ」は根神となって、部落全体の宗教的支配者となった。

これらの構造から、沖縄における女性は一家一族に対する権力者となって、母系制による地位が優位に働き、地域によっては現代に至り残存している。

沖縄に鉄器が現れるのは次の按司時代からであり、当時は能率の上がない石器や木器で耕作を行い、幼稚な武器で部落間の闘争を繰り返していたため、永く古代に取り残されたかのような境遇に置かれたと推定されるのは、先月述べた「沖縄の後進性」のところでも述べている。

次項に出てくる「城」(グスク)の構築も部落時代に始まる。当初は部落の中心地として宗教的な意味合いが強かった。

(3) 農耕の発展

日本における弥生時代は紀元前 2~3 世紀からで、縄文時代に代わる水田農耕と、金属器(当初は青銅器)を用いた新たな文化として一大改革をもたらしている。

弥生時代に遅れること長い時を隔て、沖縄では 11 世紀頃になってようやく稲作を携え水田農耕をもって移ってきた人を「あまみきよ」といって、先祖と国の話を「おもろ」(民族歌謡)として歌い、踊りに合わせて舞われる。その中の『むかしはじまりや』(昔、天地のはじめに)と国土創造の神を語り伝承している。

「あまみきよ」とは「海の人」とか「海部」(あまべ)であり、海のかなたから移住してきたことを意味する。「おもろ」とは、沖縄方言の「思い」から来た語である。

沖縄の場合も、漁猟採集時代に続く農耕の時代は奄美諸島経由で移入され、この後に水稻が開始されたのは、原始的な農耕具の痕跡調査から沖縄本島北部から上陸したことは間違いないであろう。

その後、この北部地域には水田耕作を行うに肥沃な適地が乏しく、しだいに南下し中部や南部に移り住むようになる。この時代、先端をいく水田農業で先住者たちを追い出し、更に島全土を支配し、居住区域を拡大していったと思われるが、この時期は未だ鉄製の農耕具は現れてない。鉄器の農耕具は、この後 100 年を過ぎて日本から移入される。

(4) 按司時代

鉄製農具がなくとも農業生産は次第に増大し、それとともに階級分化が始まる。それは血縁共同体から地域共同体へと進化し、土地と権力を一手に支配する者の現れとなった。

元は根人と呼ばれ血縁部落の長であった者が、複数の部落を支配下に置くようになると、現在の村に当たる「間切」(まぎり)と称するものが形成され、間切の長を按司(あんじ)と呼んだ。

11 世紀から 12 世紀のこの時期、各地に割拠する按司たちの勢力拡大の争いが特徴で、盛んに領地の吸収合併が繰り返された。

中でも、良港を持つ按司の勢力は強大で、特に日本との貿易を通じた鉄の輸入は、武器や農工具の完成品として、あるいは鉄塊のまま輸入し加工の技術が導入された。

これらの胎動は、古く9世紀に始まっているとの説もあるため、地域による発生時期に格差があったかもしれない。

按司の武力による土地と人民に対する支配力は、即ち領主たることを意味し、「大親」（おおおや）、「世の主」、更には「王」として、次第に按司の中の按司たる地位を確立する者が発生するようになる。

按司たちの多くは、小高い丘の上に石を積み上げて囲い、部落時代より発展させた城（ぐすく。註：参照）を築き、守備を固めて居住し、現在、古城址は100箇所以上知られている。

按司は、各部落に「掟」（うっち）という職を置き、その多くは根人から選ばれた。掟は耕作農民の代表者として部落民の統制と租税や貢租の徴収、生産品や魚介類などの上納に携わった。

按司の発生は、日本の武士勃興（鎌倉時代）と時期を同じくするが、それは偶然と切り言いようがなく、両者間に歴史的な関連はない。

按司は領主たる存在に相違はないが、根屋（部落）で耕作していた土地を収奪し、やがて統一王へと向かって勢力を伸長させていく。

註： 城と書いてグスク、グシクと読むが、当初は日本における城のように軍事的拠点として作られたものではないと推定されていた。

城（グスク）は、奄美群島から沖縄本島、南方の先島にまで及び、2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」としてユネスコの世界遺産に登録された。

城は王や按司の居城としての他に中心部には御嶽（うたき）という祭祀を行う施設があつて、これによって、必ずしも軍事的な拠点として造られたものではないと今は考えられており、他にも、初期の集落発生に伴う防護のための囲いなどの諸説がある。

築造は石や土塁（奄美に多い）などによって行われ、石組の構築技術はペルーの世界遺産であるマチュ・ピチュと比較されるほど高い技術力が評価されている。



うるま市にある「勝連城」跡



中頭郡北中城村にある「中城」跡

(5) 琉球最初の王は源為朝の子か

下のイラストはインターネットから借用したもので、文章が端的に舜天像を示していたので掲載してみた。

琉球王国を建国した 舜天王



何を隠そう私の父は鎮西八郎、源為朝なのだ。
母の話によると、実は為朝は島流しにされた伊豆大島を脱出して琉球に漂着。そこで大里按司の妹だった母と結婚して生まれたのが私らしい。

父は、家族を連れて故郷に帰ろうとしたが竜神のたたりで海が荒れ、結局、母と私を残して父は旅立ってしまった。私たち母子が、父の帰りを待って暮らしていた洞窟がテラブのガマだ。

当時の琉球は、まだ神代の時代で、利勇という悪人が権勢をにぎっていたので世の中は大いに乱れていた。そこで、浦添按司だった私が、利勇を滅ぼして、1187年に琉球王国を建国した。鎌倉幕府ができる5年前のことだ。

これはないしょの話だが、実は私の頭にはタンコブがあってこれを隠すためにカタカシラを結ったところ、これが流行してとうとう琉球の男のヘアスタイルになったのだ。

これらのことは、先に述べた「中山世鑑」に書かれているのである。「中山世鑑」は後の述べる慶長14年（1609年）の「薩摩藩侵略」から40年を過ぎて書かれた琉球国の正史であることを考えれば、日本国と琉球国との同祖論を称えたい気持があったかもしれない。

源為朝（1139～70年。又の名を鎮西八郎為朝）は、清和天皇七代目の後裔である源為義（1096～1156年）の八男として生まれた。源為義の長男は源義朝（1123～68年）であるから、鎌倉幕府を開いた源頼朝（1147～99年）や、稀代の英雄・義経（1159～89年）は為朝の甥に当たる。

言い伝えによれば、為朝は身長7尺（2m超）で剛力無双、5人掛りの弓を引く使い手ながら、傍若無人なところがあったそうだ。

保元元年（1156年）から始まった「保元の乱」の後、為朝は伊豆大島へ流されたが、流刑地でも暴れて国司に従わないばかりか伊豆諸島を事実上支配したため、追討を受け割腹自害したと軍記物語「保元物語」に書かれている。これが「切腹」の史上最初の例となった。

ところが、為朝は自害したと見せかけ伊豆大島を逃れ、沖縄においては舜天王の父として、埼玉県北本市の大島氏、岩手県宮古市の閉伊氏、長野県伊那の座光寺氏の他、広範囲に為朝を祖始とする家系の伝説が残っている。

右の絵は江戸時代末期の浮世絵師・歌川國芳が書いた源為朝像である。

「おもろ」によれば、天帝の遣いとして下界に下った神「アマミキヨ」の子に始まる天孫氏の王統は25代続き、その後、臣下によって天孫氏が滅ぼされ、国が乱れていたときに、善政を敷いて天下統一したのが浦添の按司である舜天とされている。

天孫降臨は神話・伝説の世界であって、舜天が最初の琉球統一王として浦添城を拠点とし権勢を誇ったのは、伝説から現実の世界へと歴史の移行が認められる。琉球で文字（漢字）が使用されるのは12世紀であり、この頃からいささかの記述が始まったと想定できるが、この件に関し残された資料はない。

王統は第二代の舜馬順熙、第三代の義本（在位1238～1248年）と続き、賞罰などの決まり設け善政を敷いたので、国は富み人民は安楽であったと伝わる。そして第三代義本の時代に、飢饉が続き疫病が蔓延したので、義本は己の不徳から察して、浦添按司の英祖に王位を禅譲したため、王統は73年間で絶えた。



◎舜天王統の系譜

初代：舜天（しゅんてん、1166～1237年）、
在位1187～1237年

二代：舜馬順熙（しゅんばじゅんき、舜天の子、1185～1248年）、在位1238～1248年

三代 義本（舜馬順熙の子、ぎほん、1206～没年不詳） 在位1249～1259年

(6) 太陽の子、英祖とその王統

舜天王統から引き継いだのは英祖（1229? - 1299年）で、浦添按司で伊祖城主・恵祖の子である。

歴史書「中山世譜」によれば、母の懐に日輪（沖縄方言で太陽のことはテダ）が入りやがて英祖が生まれたと記している。したがって、後には英祖日子（テダコ）と呼ばれた。

舜天の場合と同じく、二つの歴史書ともに、王の出自を並々ならぬ理由付けをもって英雄視し後世に伝えている。

これらを見る限り、舜天王統から英祖王統への交替は、禪譲と表現されるように、争いなく平和的な移行であったことが理解できる。

英祖は、先ず農業生産の向上による人民生活の安定を図るとともに、租税制度による支配体制を強めた。それは、徴税の機構整備による行政制度の確立に他ならないので、封建制度への萌芽と見ることできる。政治形態における一つの転換期である。

しかし、善政といわれながらも、人民側からすれば収奪機構の整備に他ならなかった。これを端緒として、沖縄人民にとって収穫や生産が我が身の富益に繋がらない苦難の道への始まりと見ることできるであろう。

他にも、英祖王が執った支配力の一つに、周辺島々による入貢（英祖を琉球王と認め、貢物をもって恭順の意を表すること）があった。それは先島を除き奄美諸島を含めた広範囲に及んだ。

英祖王の治世を継承し第二代、第三代と支配権を行使したが、第四代玉となった玉城は、1313年に王位に就いたが、玉城王は酒色にふけり、狩猟を好み、政務を顧みなかったため、按司たちや人民から信頼を失い、それが起因となり「世の主」（按司の中の按司）を名乗る者が沖縄本島の北部と南部に現れ、北山、南山、それに玉城王の中山と分立してしまった。これが後に「三山分立」とか「三山鼎立」と呼ばれる政権の分裂である。

この「山」というのは、中国大陸において1368年に「元」が滅び、「元」に代わって覇者となった「明」（みん。統治は1368～1635年）が呼んだもので、独立したそれぞれの勢力圏を一山に擬えたものであろう。

この三山分立は、玉城王の治世に対する不満だけが原因だったとはとは考え難い。王統交代時には、必ずといってもいいほど王の懈怠による悪政が取り沙汰されるけれども、英祖王統の初代以降、一見、統一政権の形態は整いながら、次第に強化される徴税制度に対する不満とともに、配下にあった各地の領主たる按司たちが、次世の王権奪取に野望の眼を向けたとしても不思議はない。

英祖王統は第5代の西威まで続くが、北山、南山との武力争いに疲弊し、遂に1350年（日本では南北朝時代）に浦添按司の察度（さっと、1321～1395年）が中山王に就いく。

◎ 英祖王統の系譜

初代：英祖（えいそ、1228～1299年）、在位1260～99年

第二代：大成（たいせい、1247～1308年）、在位1300～08年

第三代：英慈（えいじ、1268～1313年）、在位1309～13年

第四代：玉城（たまぐすく、1296～1336年）、在位1314～36年

第五代：西威（せい、1328～49年）、在位 133～49年

(つづく)

今月分の参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月初版、日本放送出版協会発行
新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月初版、株勁草書房発行